

建設祭に臨みて——土木工学の名称に憶う

島崎孝彦*

昭和 37 年の第 14 回国土建設週間における行事の一つとして、37 年 7 月 10 日、日比谷公会堂で行なわれた建設祭の末席に列し、同事業関係の功績者として建設大臣から表彰された一員であります。筆者自ら顧みてこの表彰にはあえてあたるどころでなく、ただ長く建設関係の事業に従事したというだけのもので、功績などとは思ってもよらぬことであります。にもかかわらず世の文化の先駆をなす建設事業関係のかくも盛大なる建設祭において、はからずも建設大臣から表彰されましたことは光榮至極でありまして、かねてからご指導を賜わっております学会員各位に深謝するとともに、今後いっそう努力すべきであると決意を新たにしている次第であります。

この建設祭に臨みまして考えさせられたことは、この名称が土木祭でなく建設の名が用いられ、また表彰の主体が土木大臣でなく建設大臣であることであります。この建設の意義は、いわゆる土木、建築を包含する意図もふくまれていると思いますが、とくに土木についていえば各所において土木なる言辭が実際にすたれつつあるという証左であって、それにはおおいに理由があると思われまゝす。すなわち、土木工学なる名称そのものについて、われわれ同友はすみやかに開眼すべきではあるまいか、この問題ではすでに土木学会誌において二、三の先賢者から論ぜられているところであって、われわれも同感を持つ一人であります。この機会に私見の一端を述べさせていただきます。

結論を先に言えば、土木工学なる名称を「国土工学」あるいは「文化工学」と改称したい。その先頭を切り、まず「土木学会」の名称を「国土工学会」あるいは「文化工学会」と改名することを提唱したのであります。この改名だけならば土木学会独自の決定で実現できる問題でありまして、あたかも建設省、建設局、部、課が現存しているのを大きく包容し、さらに進んでは国土省あるいは国土局、部、課に押し進めんとするものであります。

この際わが土木学会がこれを実行すれば、自然、各大学その他における土木の名称も改められ、またひいては、すべての関係法規の用語あるいは辞典なども追隨して改正されることは当然のすう勢になると思われまゝす。

なお、この改名の理由としては、常識的に考えてあま

* 名誉員 工博 元土木学会関西支部長

りにも明らかなので、あえて多言を要しないと思ひます。が、試みにここにあげてみますと、元來、土木なる言葉はなんらの意義を持たないものでありまして、一般には「土木工学」とはどんな学問か知らない者が大部分であります。し、はなはだしきは「土木とは土工か、土方の仕事だろう」ぐらいに考えられ、したがって同学科には労働方面の学問は入用かもしれないが、数学とか力学、理化学などの面倒な学科は必要なく、おもに土方のことについて勉強するだけだろう程度に考えられがちでありまして、新たに工学方面を志す青年でも、機械といえは強大なマンモス機械の運転から始まって、精密機械、自動車、航空機、計測器などを連想し、また電気といえはネオンサイン、イルミネーションのはなやかなものから電車、電話、冷暖房機、ラジオ、テレビなどを連想してあてがわれていますが、土木工学といえは土方と直感して軽侮の念も起こるのが実情であります。

元來土木という名の起こりは、封建時代に御普請役と称する役柄があつて、土を掘って道や河、溜池などを造り、また木を切つて柵や橋をこしらへたことから、土と木を組合せて土木と称したことに始まったもので、近來の土木施設には、まことに縁の薄いものとなつてあります。

「名は実を表わす」と言われていることから考えても、われわれ土木技術者は土木工学発展のために「名をおしむ」べきでありましよう。未來は永遠であります。もし、ただ従來、数十年間使ひなれた名称だから、それでよいではないかという意見がかりにあるとすれば、將來、悠久の後継者のために過恨をのこすことと思わねばならないでしょう。こう考えると、われわれ現代当事者の責任もまた重いといわねばなりません。

わが国の明治 10 年代の大学では土木工学とは言わず、建築も一緒に工部大学と稱し、卒業生は工学士でなく、理学士であつた。すなわちわれわれ土木の大先輩たる古市公威、倉田吉嗣、原 竜太、野村竜太郎、二見鏡三郎、和田義睦などの諸先生はみな理学士の出身であつて、国沢新兵衛氏時代からあとは工科大学出の工学士となつております。これは余談として、外国では土木工学は「シビル エンジニアリング」と稱しているのは、いわゆる文明開化を促進する工学の意味で、事實産業文化の先端をゆく工学であります。

要するに土木の名称はわが国の実際を見ても、すでに各所において敬遠されて建設あるいは施設などの名が用いられていますが、建設では建築とまぎらわしいきらいもありますので、これらの混迷状態から脱皮し、これに指標を示すべく、まず、わが土木学会が改称の先駆者となって、「国土工学会」あるいは「文化工学会」と改名せられ、もって一般的にも土木の名を発展解消に導きたいものと思つるのであります。議論の時代はすでに去っているとしますので、すみやかに実現されるよう念願してやまない次第であります。

島崎孝彦氏略歴

明治 31 年 第 3 高等学校（京都大学の前身）工学部土木工学科卒、ただちに内務省に入り約 10 年間治水および上下水道関係に従事
明治 44 年 朝鮮総督府技師
大正 11 年 大阪府に入り水道部下水課長、同水道部長を歴任、昭和 15 年退職せられるまで上下水道の権威として活躍せられた。

（原稿受付：1962.7.11）

書 評

北海道のみなと

中村 廉次 著 栗林商会東京支店刊

われわれ技術者がなにか新しいことを始めようとする場合にとる普通の方法は、まず過去の文献を調べ、理論をつくり、それを実験によって実証しようというやり方である。わが国に近代的な港湾建設技術が導入されてすでに 100 年に近いが、当時の工事記録や計画の記録は意外に少ない。かって私が神戸港に勤務していた頃、神戸の古本屋でガリ版刷りの神戸港工事誌がかなりの高値を呼んでいたこともこのような記録の希少性を物語るものといえよう。

今回土木学会名誉員に推挙された中村廉次氏の上梓になる本書は、このような意味できわめて貴重な労作である。

函館港や小樽港における有名な広井 勇博士の活躍を初めとする諸先人の激烈な自然条件下における苦労の跡が綴られていて興味深い。火山灰をセメントに混入して

使い初めた明治 35 年の話、斜路を使用して初めて進水させたケーソンがヘットに関する研究不足のため途中で膠着しておろすのに骨を折った話、波力計や波高計を使用した波浪の観測、小樽、留萌間で 56 マイルにわたるケーソンの曳航の話、冬季の激浪による防波堤の災害、室蘭港の石炭積出施設の変遷、大正 13 年に林 千秋氏が勇弘築港論として苫小牧港の建設を提唱した話など……開発当初の新天地における苦労多き開拓者的な事業の跡が、当時の記録をそのままおりまぜて生き生きとされる。ただ一、二欲をいえば、当時の計画と今日の姿と比較対比できるような平面図が添付されていると読者に対していっそう親切であったと思われることと、第 2 編の地方港湾の部になると記録の収集が困難なためあるいは全部の港を網羅しようとしたためか簡単な紹介程度になっている点が気になった。この種の本としては非常に読みやすくできているので若い港湾技術者の方々に一読をおすすめしたい。

著者：名誉員 鶴見臨港鉄道KK 監査役・室蘭埠頭KK 顧問
体裁：B 5 判 254 ページ 付図 11 枚 定価 950 円

【運輸省港湾局 前田 進・記】

中村 廉次氏著「北海道のみなと」頒布について

本会名誉員 中村 廉次氏が精魂を傾けられた力作「北海道のみなと」が上記書評のとおり関係者の手によりこのほど出版されました。非常に数少ない貴重なデータの集積で港湾技術者ならびに土木史研究者の参考となろうかと存じます。著者の御厚意により会員の方には学会で実費で頒布いたしますから御申込み下さい。部数はきわめて少ないので品切れとならぬうちに至急お願いいたします。

記

体 裁：B 5 判 254 ページ・折込付図多数・上製

実 費：950 円（送料は学会で負担します）

申 込 先：土木学会（新宿区四谷一丁目・TEL 351-5138 振替東京 16828 番）